

ユニバーサルアクセス時代の日本における

大学入学者選抜の方向性について

—制度比較調査と高三担任調査にもとづいて—

荒井克弘(大学入試センター)・河野銀子(山形大学)・○腰越滋(東京学芸大学)・
○中島英博(名城大学)・○尾中文哉(日本女子大学)・山村滋(大学入試センター)

1. 前提となる制度比較調査

本調査は、(1)1999～2002年度科学研究費補助金基盤研究(A)「マス高等教育段階における新しい教育接続の研究—スタンダードと大学入試の国際比較分析」(研究代表者:荒井克弘)および(2)2006～2008年度科学研究費補助金基盤研究(B)「大学ユニバーサル段階における中等教育の再定義—「積み上げ」型システムの転換」(研究代表者:今井重孝)による調査研究および、(3)2008年度教育社会学会第60回大会課題研究1「入学者選抜の変容と大学・高校」の趣旨を融合させて問題意識を練り直した(4)2009～2010年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究「ユニバーサルアクセス時代の日本における高大接続の再定義」の中で実施したものである。

(1)～(2)では、大学進学率が高まり、マス段階からユニバーサル段階へ移行しつつあるなかで、大学入学者選抜を中心とした高大接続のあり方が決定的に変化しつつあるとの認識に立ち、その中でどのような改革を行っていく必要があるかという問題関心から、インタビューとドキュメント分析を主たる方法として一連の制度比較調査を行ってきた。

まず、(1)では、新しい高大接続のあり方の第一のタイプとして、「大学に必要な能力」を意識した高大接続のあり方が提示され、それは従来のアチーブメント型能力観ではなく、(実際に使える)コンピテンシー型の能力観をもつことが指摘された。この具体例としては、特にオレゴン州で90年代以降なされてきたCIM, CAM, PASSといった接続の枠組みが特に注目され、同様の傾向をもつ事例としては、タイのNETなどが挙げられた。他方、新しい高大接続のあり方の第二のものとして、そうした「能力」をキーワードとすることなく、「進学意欲」や「職業」をキーワードとして高大接続を実現しようとするノースカロライナ州のCollege Tech Prep、あるいは韓国の「連携教育」などが紹介された(荒井・橋本 2005)。

次に、(2)では、新たな事例としてフィンランドに関心が集まり、それが教養型のルキオと職業型の職業学校、高等教育段階での大学とAMKという教養/職業の二元制を徹底させていることが明らかにされた。その

中では「ホリスティック」という視点でとらえることの重要性も主張された。他方、オレゴン州についてはCIMやCAMが定着しつつあるものの、「大学に必要な能力を前提とした高大接続」という第一のタイプより、第二のタイプの性格ももつつあることが明らかにされた(今井編 2009)。

(3)では、専門高校の調査・教育課程編成に関する全国調査に基づいて、学力の低い層の高大接続がAO入試や推薦入試に偏りつつあること(中村 2008, 山村 2008)、大学満足度と高大接続情報の接合にもとづいては「学業充実群」が「大学満足度」の諸尺度においても高くユニバーサル化時代に逆に選抜性が重要となること(木村 2008)などが指摘された。

(図1) 高大接続の二つのタイプ

①「大学に必要な能力」 意識型高大接続	②「大学に必要な能力」非意 識型高大接続
オレゴン州 PASS、 タイ NET など	ノースカロライナ州 College Tech Prep、 韓国「連携教育」など

2. 今回調査の概要について

2-1. 対象の設定

(4)においては、一方では(3)の問題提起をうけて「大学入試」を主題することとし、他方では(1)(2)の制度比較調査をふまえて中等教育における評価・受験指導に直接携わる高三担任教諭を対象とすることとした。

2-2. 調査票の設計について

上記のような調査研究から、生徒の「能力・技能」とのかかわりでどのような「入試形態」への方向付けがなされるのか調査することがポイントと考えられた。より詳しくいえば、次の四つの点である。第一に、実際に生徒が獲得している「能力・技能」はどのようなものであると認識しており、それを前提にして担任がどのように指導を行うのか、ということ。第二に、実際の「入試形態」を目の前にして生徒にどのような「能力・技能」への指導を行うのか、ということ。第三は、そうした場面においてそもそも担任は本来どのような「能力・技能」が獲得されているべきと考えているのかということ。第四に、こうした「指導」のあり方を前にして、どのような「入試形態」が望ましい

と考えているのか、ということである。

このような設計を採用したもっとも重要な意図は、「1.」の制度比較調査の中であらわれた高大接続改革の二つの類型にもつげば、現在の日本においてどのような大学入学者選抜を具体的に提案することができるか、高三担任教諭という高大接続の最前線に立っている人々の見解によりそいながら考察したい、ということにあった。

2-3. 「能力・技能」四項目の選定

そして、この場合の「能力・技能」について、全国大学の一年生(34,802名)を対象とした山村・鈴木・濱中・佐藤(2009)の調査結果の一部を好意により使わせて頂いて具体化することとなった。それは、オーストラリア・クイーンズランド州の後期中等教育カリキュラムの共通カリキュラム要素をもとに作成した26の「能力・技能」項目について、それぞれ「高校で身に着いたか」と「大学で必要か」について四段階で訊ねた項目に関する結果である。そのそれぞれについて、因子分析を行ったところ、「高校で身に着いたか」の第一因子は、分散の約43%を説明するものであったが、この第一因子とこの項目に単純にスコアを与えて計算したときの値と比べたところ異なる結果を示していること、および「知識力・使用力・読む力・解釈力」vs.「分解力・統合力・仮説構築力・方策立案力」という内容からして、これを、(従来型の学力という意味での)「アチーブメント型の能力・技能」対(実際に使えることを重視する新しい学力という意味での)「コンピテンシー型能力・技能」と解釈することが適切と判断した。そして、この両極から、質問文にしたときわかりやすいものとして、「基本的な公式や法則、事柄などを記憶し必要に応じて思い出す力」(以下、知識力)と「他人の意見・行動に根拠のある批判ができること」(以下、批判力)を選び出した。

また、「大学で必要な能力・技能」の因子分析結果で選び出された第一因子は、分散の約51%を説明するものであったが、この第一因子は、この質問項目に単純にスコアを与えて集計したときの順序にほぼ一致しているため、「大学で必要な能力・技能」/「大学で必要としない能力・技能」の軸がほぼそのままあらわれたものと解釈することが適切と判断した。そして、この第一因子の両極から、「大学で最も必要な能力・技能」として「自分の意見をわかりやすく説明できること」(以下、説明力)、「大学で最も必要としない能力・技能」として「文章や人の考え方、絵画などに感情移入できること」(以下、感情移入力)を選んだ。この「感情移入力」を選んだのは、審美性や評価性ともかかわって(2)で主張された「ホリスティック」という視点に関連があることも背景にある。

そして、全項目に関する相関行列も参考にして、この四項目が比較的独立性が高いものであることをたしかめた上で、「能力・技能」の具体的項目とするこ

ととした。

2-4. 調査票の構成

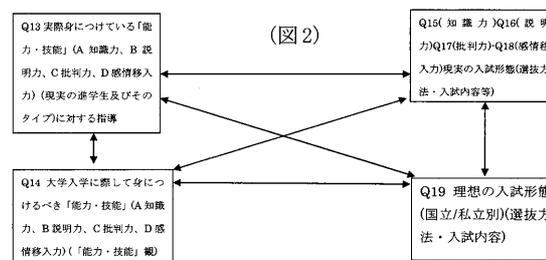
・学校に関わる質問

Q1 学校名、所在 Q3 設置区分 Q4 課程 Q5 設置学科
Q6 進学状況

・回答者に関わる質問

Q7 年齢 性別 Q8 在籍校勤務年数 教職経験年数
Q9 最終学年担任経験回数 Q10 進路指導部経験年数
Q11 主な担当教科 Q12 前任校進学状況

・メイン仮説に関わる質問



2-5. 標本抽出と調査票回収状況

母集団は、全国の高校および中等教育学校(5195校 2009年5月15日時点)にすることとした。

抽出方法としては単純無作為抽出を選定し、予算の関係から母集団から半数を抽出して「大学進学者が比較的多いクラスの高三担任」に回答を依頼した。実際のサンプル数は2597校(一校は廃校のため)、回収数は1172校、回収率は45.1%であった。

3. 分析結果(腰越)

3-1. 問題設定:

「高校教育の現状と大学入試等に関する調査」で回収された1,172件の高三担任教諭からのアンケート票を分析するに際して、まず自由記述に目を通すところから始めたところ、意外にも学力試験を中心に入試を行う方がよいという意見が、散見された。

では、現今の高三担任教諭たちのうち、例えば学力選抜を選好する人たちにはどのような特徴がみられるのだろうか。また、他の選抜形式を評価する教諭との違いは何であり、どのような事由によって選抜形式の選好度の違いがもたらされているのだろうか。まずは、「Q19 入試形態への評価」を大学入試の形式の選好度とみなし、これを目的(従属)変数とした重回帰分析を試行し、選抜形式の選好を規定する要因を探ってみることにした。

3-2. 重回帰分析:

ステップワイズ法による重回帰分析で、有意な説明変数xを(探索的に)探した後、それをパス解析でも検証してみた。

3-2-1. センター試験

(表 1)

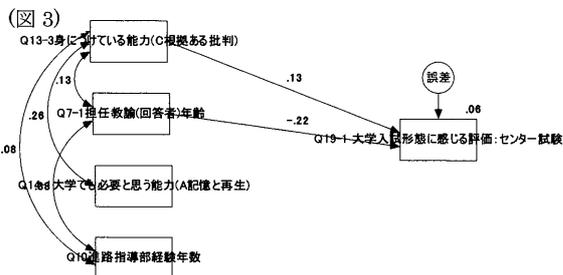
	標準化係数β	
Q13-3 身につけている能力(C: 批判力)	0.20	***
Q7-1 担任教諭(回答者)年齢	-0.27	***
Q14-1 大学でも必要と思う能力(A: 記憶と再生)	0.15	***
Q10 進路指導部経験年数	0.11	*
R ² 集	0.14	

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001

この結果からは、センター試験を選好する高三担任教諭(Q19_1)は、自分が担任する自校の生徒が、能力C(Q13_3 批判力)をある程度身につけていると認識している旨が窺われる。また、大学で必要な能力(Q14_1)として、能力・技能A(知識力)が高三担任たちには想起されがちであり、進路指導部経験(Q10)のある者が含まれる傾向が看取される。

興味深いのは、担任教諭年齢(Q7_1)の標準化係数βが、-を示していることである。ここからは一見すると、センター試験を選好する担任教諭年齢層が、若手なのではないかと思わせる。ただ、そうすると、Q7_1とQ10は矛盾するように見えるがために、次のようなもう一つの解釈が提起される。即ち、高三担任教諭の経験値があがるほど、センター試験への選好度が下がり、教諭たちに不信感を抱かせてしまっている、という解釈の可能性である。

そこで今度は、重回帰で得られた4つの説明変数xを用いてパス解析を実行してみたところ、(図3)のような結果を得た。



注：有意なパスのみ表示。 y=(Q19_1)

*** p<.001 : (Q13_3)→y, (Q7_1)→y, (Q13_3)→(Q7_1), (Q14_1)→(Q13_3), (Q10)→(Q7_1)

** p<.01 : (Q10)→(Q13_3)

(図3)では、有意なパスのみを表示してある。ここでは、Q13_3(能力C: 批判力)からQ19_1(高三担任教諭たちのセンター試験への選好度)へのパスは残るものの、Q14_1(大学で必要な能力A: 知識力)からQ19_1へのパスは消滅している。ここでのQ14_1(大学で必要な能力・技能A: 知識力)は、Q13_3(生徒が実際に身につけている能力・技能C: 批判力)と相関があり、間接的にQ19_1に影響を及ぼしているに過ぎないことが分かる。

また、Q10とQ7_1の共分散が0.1%水準で有意であり、且つ両者の相関係数が0.381であることから、重回帰分析の結果から推論した二つの考え方のうち、後者を採択することが妥当であることが確認される。即ち、センター試験を選好する高三担任教諭(Q19_1)は、相対的若手である、という解釈可能性よりも、寧

ろ経験を積んだベテラン教諭になるにつれて、センター試験にそれほど信頼を置かなくなっていくという解釈可能性の方が支持される、というわけである。

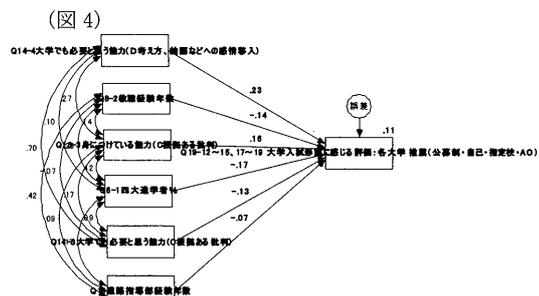
3-2-2. 推薦

今度は、推薦試験やAOと全て纏めて合成変数yとし、これへの選好(評価)度の規定要因を探った。方法は先に同じである。

(表 2)

	標準化係数β	
Q14-4 大学でも必要と思う能力(D: 考え方、絵画などへの感情移入)	.266	***
Q8-2 教職経験年数	-.178	***
Q13-3 身につけている能力(C: 批判力)	.302	***
Q6-1 四大進学者%	-.244	***
Q14-3 大学でも必要と思う能力(C: 批判力)	-.153	**
Q10 進路指導部経験年数	-.098	*
R ² 集	.237	***

* p<.05, ** p<.01, *** p<.001



注：有意なパスのみ表示。 y=(Q19_1, 推薦①②③④+AO⑤⑥)

*** p<.001 : (Q14_4)→y, (Q8_2)→y, (Q13_3)→y, (Q6_1)→y, (Q13_3)→(Q6_1), (Q8_2)→(Q13_3), (Q14_4)→(Q13_3), (Q14_4)→(Q6_1), (Q14_4)→(Q13_3), (Q8_2)→(Q6_1), (Q8_2)→(Q14_3), (Q8_2)→(Q10), (Q13_3)→(Q14_3), (Q6_1)→(Q10)

** p<.01 : (Q14_3)→y, (Q6_1)→(Q14_3), (Q13_3)→(Q10)

* p<.05 : (Q10)→y

(表2)と(図4)とを見比べると、6つの説明変数(x)から目的変数(y)へのパスは消滅しておらず、係数の符号にも変化がない。興味深いのは、y(大学推薦・AO入試試験への評価)への影響として、Q13_3(生徒が実際に身につけている能力・技能C: 批判力)は正の影響を持っているのに対して、Q14_3(大学で必要な能力・技能C: 批判力)は負の影響をもっていることである。寧ろ、y(大学推薦・AO入試試験への評価)に影響を及ぼすパスとしては、Q14_4(大学で必要な能力・技能D: 感情移入力)が正の影響をもつことが示唆されている。

さらに、ここでも気になるのは、Q8_2(教職経験年数)とQ10(進路指導部経験年数)からのyへのパスが、何れもマイナスであり、両者の相関は0.415で0.1%水準有意となっていることである。教諭の教職経験や進路指導部年数が増すことで、推薦やAOへの評価が下がる傾向が窺えるといえよう。

3-3. 構造方程式モデリング(SEM)の試行:

3-3-1. 確認的因子分析モデルの設定

Q15~Q18の因子分析結果とQ13~Q14の因子分析結果を統合し、5つの潜在変数相互に共分散を仮定し、AmosによってSEMを実行すると、下表のような相関係数の結果を得た。(CFI=.598、RMSEA=.112、AIC=12409.71)

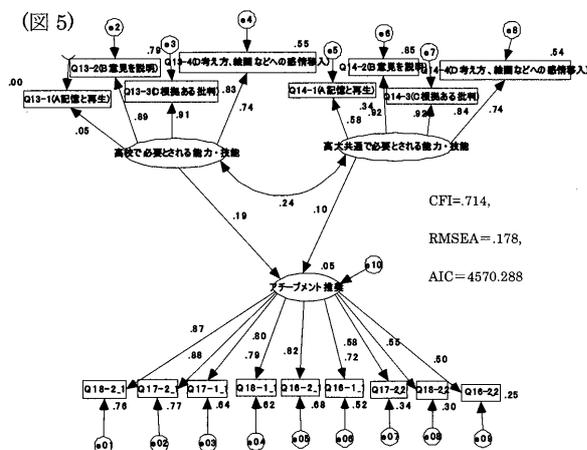
(表 3) 1つの潜在変数と複数の指標

	推定値	有意水準
高校が必要とされる能力・技能 (←) 高大共通で必要とされる能力・技能	0.52	***
実技・適性・総合 試験の推奨 (←) アーチブメント推奨	-0.82	***
実技・適性・総合 試験の推奨 (←) 推薦推奨	0.60	***
アーチブメント推奨 (←) 推薦推奨	-0.88	***
高校が必要とされる能力・技能 (←) 推薦推奨	-0.65	***
実技・適性・総合 試験の推奨 (←) 高校が必要とされる能力・技能	-0.58	***
高大共通で必要とされる能力・技能 (←) 推薦推奨	-0.24	***
実技・適性・総合 試験の推奨 (←) 高大共通で必要とされる能力・技能	-0.22	***
高校が必要とされる能力・技能 (←) アーチブメント推奨	0.04	***
高大共通で必要とされる能力・技能 (←) アーチブメント推奨	0.20	***

*** $p < .001$

(表 3)のうち、Q13Q14 から得られた 2 潜在変数と、Q15 から Q18 から得られた 3 潜在変数との間で正の相関が見られるのは、「高校が必要とされる能力・技能」潜在変数 ↔ 「アーチブメント推奨」潜在変数、「高大共通で必要とされる能力・技能」潜在変数 ↔ 「アーチブメント推奨」潜在変数の二つしかない。よって、この部分を基本に多重指標モデルを考えていく。

3-3-2. 多重指標モデルの設定



(図 5)は、Q13Q14 から得られた潜在変数より、Q15 から Q18 で得られた 3 潜在変数の一つの「アーチブメント推奨」潜在変数へパスをひいた多重指標モデルである。適合度指標を見る限り、あてはまりがよいとは言えないが、「高校が必要とされる能力・技能」潜在変数 → 「アーチブメント推奨」潜在変数 (***) $p < .001$), 「高大共通で必要とされる能力・技能」潜在変数 → 「アーチブメント推奨」潜在変数 (** $p < .01$) の何れのパスも、弱い係数ながら有意であることに注目したい。

同様に、「推薦推奨」潜在変数に向けて、「高校が必要とされる能力・技能」 → 「推薦推奨」と「高大共通で必要とされる能力・技能」 → 「推薦推奨」とのパスを想定して、多重指標モデルを求める。すると、Table 3.2 に示されるように、前者は有意なもの (***) $p < .001$) 負の(標準化)係数を示す結果となり、後者は非有意($p = .348 > .05$)となることに気付かされる。

(表 4) 標準化係数

	推定値	有意水準
推薦推奨 (←) 高校が必要とされる能力・技能	-0.232	***
推薦推奨 (←) 高大共通で必要とされる能力・技能	0.031	n.s.

*** $p < .001$ n.s.: not significant

ここから導出される知見としては、Q13・Q14 で謳われた A から D のような生徒の様々な能力・技能を認め評価する高三担任教諭たちが、全体としては推薦選

抜を推奨することに消極的である、ということが挙げられよう。

本調査での他の研究構成員による分析や、先行研究に照らして考えれば、アーチブメント型入学者選抜ではなく推薦型選抜こそが、希望する生徒を大学に送り込むに最もてっとり早い手段として想起されるはずである。(現に非進学校では、教諭たちには推薦型選抜が選好されるのは、当然のことと推測される)。にも拘わらず、ここでの分析からは、推薦選抜推奨に対して消極的であるという、教諭たちの潜在的意識が浮かび上がってきているのである。

さらに、「実技・適性・総合 試験の推奨」潜在変数に向けて、「高校が必要とされる能力・技能」 → 「実技・適性・総合 試験の推奨」と「高大共通で必要とされる能力・技能」 → 「実技・適性・総合 試験の推奨」とのパスを想定して、多重指標モデルを求める。すると(表 5)に示されるように、前者が負の(標準化)係数を ($p = .34 > .05$)、後者は正の(標準化)係数を示し ($p = .383 > .05$)、何れも非有意という結果となった。

(表 5) 標準化係数

	推定値	有意水準
実技・適性・総合 試験の推奨 (←) 高校が必要とされる能力・技能	-0.032	n.s.
実技・適性・総合 試験の推奨 (←) 高大共通で必要とされる能力・技能	0.029	n.s.

n.s.: not significant

これらから考えられることは、高三担任教諭たちは、個別には推薦入試や実技・適性・総合試験などによる入試を進路指導の際に生徒に推奨することはあるにせよ、全体としてはアーチブメント型入学者選抜を、生徒に消極的な形ではあるが、推奨することになっていることが窺われる。この知見と、3-2-2 (図 4) で得られた、教諭の教職経験や進路指導部年数が増すことで、推薦や AO への評価が下がる傾向とを考え合わせると、高校教諭は経験値が増すにしたがって、大学入学者選抜試験への信頼を失っている、という事実が垣間見えるのである。

3-4. まとめ

ここまでの分析で最も確認したいことは、経験年数を増すにつれて、高校教諭たちが大学入学者選抜試験への信頼を低めている可能性がある、ということである。そしてそれを傍証するものとして、消極的な理由としてのアーチブメント型入試の推奨、推薦型入試推奨の選好度の低下、なのであった。

高三担任教諭たちは、アーチブメント型入試を評価するから学力選抜を望んでいるわけではない、ということが分かってきた。寧ろ高三担任教諭たちの本音としては、個性化多様化個別化の時流に振り回され、大学側がいたずらに多様な入試を取り入れ過ぎたことで、高校側の進路指導はかえって混乱をきたし、大学側の入学者選抜に対して懐疑の念を抱いている、ということになるのではなかろうか。

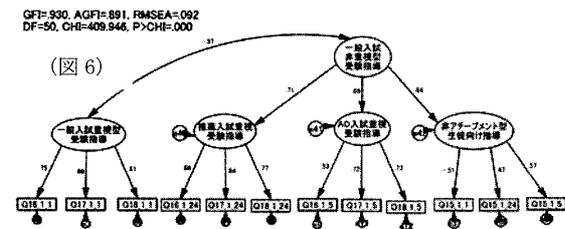
4. 分析結果(中島)

4-1. 問題設定

以下では、Q13(生徒が実際に身につけている能力)、Q14(大学入学に際して身につけるべき能力)、Q15~Q18 実際の受験指導、Q19(入試形態の評価)の4つの間に、どのような潜在的な関係があるかを、構造方程式モデリング(共分散構造分析)の手法で迫ってみたい。冒頭で示した通り、(1)実際に生徒が獲得している「能力・技能」はどのようなものであると認識しており、それを前提にして担任がどのように指導を行うのか、(2)実際の「入試形態」を目の前にして生徒にどのような「能力・技能」への指導を行うのか、(3)そうした場面においてそもそも担任は本来どのような「能力・技能」が獲得されているべきと考えているのか(4)こうした「指導」のあり方を前にして、どのような「入試形態」が望ましいと考えているのかという4点に沿って検討を進める。

なお、以下で示す結果におけるそれぞれのパスは、特に断りが無い限り、全て5%水準で有意である。

4-2. 受験指導



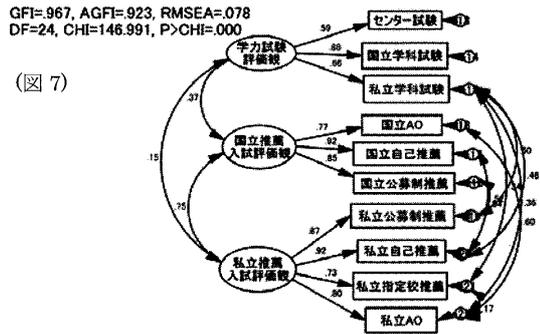
(図6)では、勧める選抜方法について分析を行った結果を示している。探索的モデルから有意でないパスを消去し、一般入試重視型受験指導観、推薦入試重視指導観、AO入試重視指導観、アチーブメントに劣る生徒に対する受験指導観の4つの因子を抽出した。この過程で、公募制推薦、自己推薦、指定校推薦については、3つのうちいずれかを勧める場合に1、いずれも勧めない場合に0となる変数へ変換した。推薦入試重視指導観、AO入試重視指導観、アチーブメントに劣る生徒に対する受験指導観については、一般入試非重視型受験指導観という2次因子によって説明できる。

この結果によれば、一般入試重視型受験指導と一般入試非重視型受験指導の間には、負の相関があり、両者は担任の先生から受験指導において対立的にとらえられている可能性がある。

4-3. 入試形態評価の背後にある潜在的要因

次に、多様な入試形態に対する評価の背後にある潜在的要因について分析する。(図7)は、同様の分析を入試形態の評価について行ったものである。同様に探索的モデルから有意でないパスを消去し、学力試験評価観、国立推薦入試評価観、私立推薦入試評価観の3因子を抽出した。AO入試評価観、私大入試評価観などは有意なモデルとはならなかったが、上のモデルで

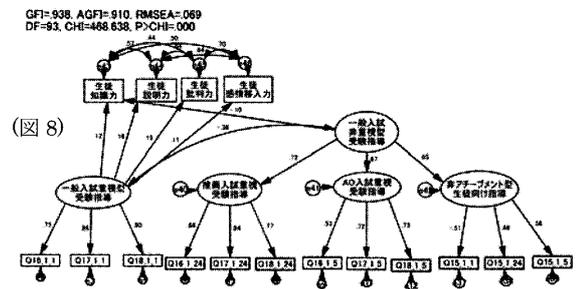
も、私立大学の学科試験と私立大学の他の入試形態、および、公募制推薦、自己推薦、AO入試の国立と私立間の相関は高い。ここでも、学力中心試験と非学力中心試験で評価が分かれ、非学力中心型試験では、国立と私立という設置形態による因子を抽出した。同じ非学力中心型試験でも、国立と私立では別の評価要因が存在している。国立推薦入試評価観は、同じ非学力中心型試験である私立推薦入試評価観と高い相関があるが、学力試験評価観とも一定の相関があり、独自の試験評価観を構成している。



4-4. 生徒が獲得している能力と勧める選抜方法

(図8)は、生徒が獲得している能力と勧める選抜方法との関係を示したものである。一般入試非重視型受験指導観から、アチーブメント型能力(知識力)、コンピテンシー型能力(批判力)、感情移入力へのパスは有意とならなかった。さらに、一般入試非重視型受験指導観から、知識力へのパスは負となっている。

この結果は、どの能力においても生徒が獲得している能力が高いほど、一般入試を勧める傾向があるものの、説明力(大学でもっとも必要とする能力・技能)が高いからと言って、必ずしも積極的に推薦入試やAO入試を勧めるものではないことを示唆する。積極的に推薦入試やAO入試を勧める要因は、生徒の能力以外の部分が大きい可能性がある。



4-4. メイン仮説部分のモデル化

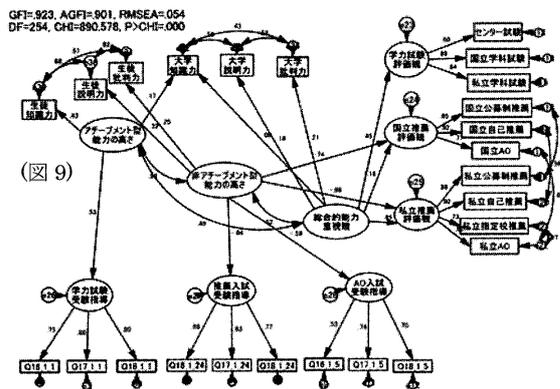
上の検討をふまえ、有意でないパスを削除して逐次的に分析した結果、得られたモデルが(図9)である。感情移入力に関連するパスについては、生徒が獲得している力、大学で必要な力とも、有意とはならなかった。担任の先生は、アチーブメント型能力重視観、非アチーブメント型能力重視観(説明力とコンピテンシー型能力重視観)、大学での学習における統合的な能力獲得重視観という3つの観点の間で、揺れているこ

とがわかる。

アチーブメント型能力重視観は、一般入試による受験を勧める傾向があることがわかる一方で、学力試験評価観へのパスは有意とならなかった。知識力の高い生徒に一般入試を勧めるからといって、必ずしも学力試験中心の試験形態への評価が高いとは言えない。

非アチーブメント型能力重視観のもとでは、AO入試を勧める傾向があるものの、推薦入試を勧めるとは言えず、かつ、推薦入試への評価も高いとは言えない。担任の先生は、生徒が非アチーブメント型能力において優れている場合、そうした生徒の選抜にはAO入試を勧める傾向があるが、そのことは必ずしも現行の推薦入試やAO入試を高く評価しているためではない。

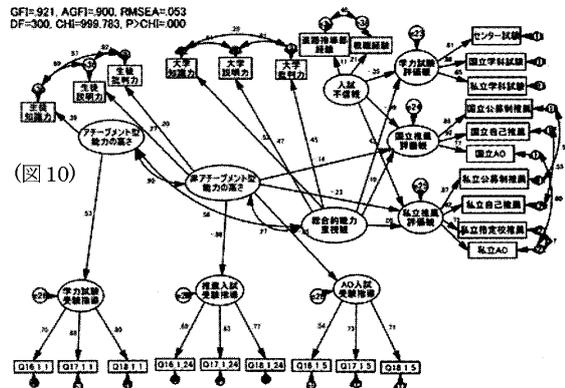
一方、先生自身は、大学での学習に必要な力として、知識力、説明力、批判力を総合した能力を重視している可能性があり、そうした観点が強いほど、現行の入試形態に、一定の評価をしている。ただし、その大きさは、国立推薦、私立推薦、学力試験の順で大きく、必ずしも学力試験の評価が最も高いわけではない。担任の先生は、大学生にふさわしい総合的な能力を評価する選抜方法としては、国立大学で行われる推薦入試のような試験方法が適していると考えていることを示唆している。



4-5. メイン仮説と大学入試不信感仮説のモデル化

この結果は興味深いものの、他の変数を考慮すると、やや異なる結果が得られる。(図 10)は、先のモデルに教職経験年数や進路指導担当年数を重ねることで蓄積される大学入試不信観を加えたものである。この入試不信観は、全ての試験に対して負の評価となっているが、特に国立および私立の推薦・AO入試に対する評価を下げる要因となっている。この要因を考慮すると、先の統合的な能力重視観に基づく現行の試験方法への評価は、先のモデルと逆転し、私立推薦、国立推薦、学力試験の順で小さい。ただし、いずれも有意に正の効果が残る。この結果は、望ましい高大接続のあり方として、大学での学習にふさわしい能力をバランスよく身につけていることを評価する上では、学力評価に偏重した選抜方法ではなく、推薦・AO入試が適した方法と考えているものの、現在行われている推薦・AO入試は、そうした理想とほど遠く、全く評価

できないという担任の先生の考えを表していると考えられる。将来の高大接続にふさわしい選抜方法を開発していく上で、推薦入試やAO入試の発展的な改善・改革が期待されていることを示唆すると考えられる。



5. 暫定的結論

以上より、高三担任教諭の見解は次のことを示している。すなわち、①タイプの高大接続が必要とされているが、現行の一般入試やAO・推薦入試はそれに答えられてはいない。そして特に後者について、知識力・説明力・批判力を総合した能力を意識した改編が期待されている、ということである。

《参考文献》

荒井克弘・橋本昭彦編 2005 『高校と大学の接続—入試選抜から教育接続へ—』玉川大学出版部、総 350p.。
 今井重孝編 2009 『大学ユニバーサル段階における中等教育の再定義-「積み上げ」型システムの転換-』平成 18-20 年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果報告書、全 198p.。
 木村 拓也 2008 「3.「大学教育への影響」を測定すること：高大接続情報と大学生調査データを「接合」する試み(課題研究 1 入学者選抜の変容と大学・高校)」日本教育社会学会大会発表要旨集録 (60),pp. 370-371.。
 鈴木規夫・山村滋・濱中淳子 2009 『大学入試のあり方を考える 高校側の視点・大学側の視点』大学入試センター研究開発部、総 149p.。
 中村 高康 2008 「1.大学入学者選抜の変容：入試多様化現象を捉える視点(課題研究 1 入学者選抜の変容と大学・高校)」日本教育社会学会大会発表要旨集録 (60), pp.366-367.。
 山村 滋 2008 「2.大学全入時代の高校教育：教育課程の特徴と高校生の受験行動・特性(課題研究 1 入学者選抜の変容と大学・高校)」日本教育社会学会大会発表要旨集録 (60), pp.368-369.。
 山村滋・鈴木規夫・濱中淳子・佐藤智美 2009 『学生の学習状況からみる高大接続問題』大学入試センター研究開発部、総 195p.。